http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.334　14/02/19

本当にやりたいこと

昨日「若紫」の最後のところを大急ぎで仕上げたが（仕上がったか？）、あの教材は、高１の時の「羅生門」と同じく、全国の多くの高２生が学ぶ教材である。作家の丸谷才一氏は、あんな雀の場面を教材にしてどうするのかと批判的で、これに続く場面（光源氏が京に戻った若紫と尼君の家を訪ねる場面。周囲の女房たちが源氏に「姫様はもうお休みになられました」とウソを言って会わせないようにしたところ、部屋の奥から「源氏様がいらしているの？」と若紫が喋っている声が聞こえてくるが、源氏はばつが悪そうにしている女房たちに遠慮して、聞こえなかったフリをするという場面。若紫は、尼君の体調が悪いので「源氏様の姿を見ると気分がよくなるってこの前僧都様が言ってたじゃない、だから教えて差し上げようと思ったのに…」などとしゃべって、なかなか可愛らしいのである）を教材化すべきであると述べていらっしゃるが、それはそれとして、やはり若紫が藤壷に似ていることに気づいて涙する青年源氏の姿は、同じ年頃の君たちに紹介する価値があるものだろうし、源氏物語前半のあらすじを説明する上でも、ちょうどイイ場面なのである。「限りなう心を尽くし聞こゆる人」の「心を尽くす」は、「限りなくもの思いをする」の意で、「心を尽くしてお慕い申し上げているあの方」という訳語もなかなかイイと私は思うし、「いとよう似奉れるがまもらるるなりけり」の「るる（自発）」「なりけり（詠嘆）」にもよく思いがこもっていて感動的である。何より、自分が本当に愛しているものの存在を改めて意識する場面なのであり、そういう場面を読み味わうことは、やはり若い君たちにとってとても大切なことなのではないかと私は思う。

＊

教員になったころ、本の装丁家である栃折久美子さんの「モロッコ皮の本」という教材が教科書に出ていた。西欧には皮で本を飾る技術があって、その技術を学ぶために栃折さんはベルギーのベルフロワ先生のもとで学ぶのであるが、最初は先生の技術の高さに圧倒されるだけであったが、修行を続ける中で、いつしかその先生の技術を本当に身につけたいと思うようになる。そして、その思うようになった時はじめて、栃折さんはあらためて先生の技術の高さに気づき、自分の進むべき道の険しさに気づくのである。それは「だからこそやりがいがある」という気持ちになる。

私は、この「本当に自分が目指したいものを見つけた時、その大変さが真に理解できる」という指摘は重要であると思う。例えば、まだ漠然と「●●大学を目指そう」と思っている時には、その勉強の大変さは実感されていないのである。実際にそこを志望することを決心し、過去問を解き、模試を受け、自分の今の実力を知ったとき、はじめて目標の高さを認識するに違いない。

＊

本当に自分にとって大切なものは何なのか、本当に自分が目指したいものは何なのか。そのことをしっかり考え、早くそれを見極めて努力を始めることが大切である。具体的な目標を定め、それに向かって挑戦を始めたとき、自分がやらなければならないこともしっかりと見えてくるに違いない。